

## 張聞天の思い出

ゴ・シャオタン著  
本庄 比佐子訳

訳者まえがき

以下に訳出するのは、Го Шаоган (А. Г. Крымов), *Историко-мемуарные записки китайского революционера*. (『中国革命家の歴史・回想録ノート』) Москва, 《Наука》, 1990. から、張聞天を回想した部分である。本書は3部より成っていて、第1部は著者の幼年時代から青年時代、革命運動への参加から1925年のソ連留学までを語る。第2部は著者が知り合った人々について、ここに取り上げた張聞天も含め、蔡和森、呉玉章、恽代英、ディミトロフ、ら13人の思い出を語っている。第3部では1920-30年代中国に関する回想と研究である。

本書の著者、ゴ・シャオタン=郭紹棠について、本書によって簡単に述べておきたい。

1905年、浙江省の農家に生まれた。19年、上海の製薬工場に徒弟として就職したが、外部から働きかけられたストライキに同調したかどで数カ月で馘首された。翌年、質屋に奉公したが、勉強がしたくて21年に春輝中学(江蘇省)に入学した。五四時期の新しい潮流と進歩的な教師陣の下で、社会意識に目覚め、生徒たちが農民のために開設した夜学の活動に参加した。24年に上海へ出て、上海大学に入り、学生運動にも積極的に加わった。本書には五卅運動について詳しい記述がある。この年、25年に中国共産党に入党した。モスクワに孫逸仙記念中国労働者大学(クートカ)が創設されるのを知って留学を希望したが、恽代英から東方労働者共産主義大学(クートベ)への入学を勧められ、推薦してもらった。2年間クートベで学んだのち赤色教授学院へ進み、学習を続けるか

たわら、コミンテルン執行委員会東方書記局で働いた。赤色教授学院に入学後、ソ連共産党に入党している。31年に蔡和森、張国燾、張聞天と著者の4人が帰国を決めたところ、コミンテルン執行委員会の書記・ピヤトニツキーから、ロシア語の達者な張聞天か著者のどちらかが残るよう求められて、著者が残った。その頃、著者は国際レーニン学院とクートベで中国人学生を教えており、さらにソ連の各地で軍事や技術を学ぶ中国人を援助する仕事もしていたことが、著者が残留することになった事情であった。

1938年、著者は逮捕、投獄され、のちに極北地方におくられた。スターリンの死の翌年、54年になって名誉回復されて党に復帰し、研究生生活にはいった。現在では歴史学者クルィモフの名で、中国革命史および現代中国社会思想史の専門家として知られている、という。著書に、管見の限りで、Афанасий Гаврилович Крымов, *Общественная мысль и идеологическая борьба в Китае (1900-1917)*. (『中国における社会思想とイデオロギー闘争』) Москва, 《Наука》, 1972. がある<sup>1)</sup>。

文革中、中国にいる著者の関係者は「ソ連の代理人・クルィモフ」との関係の問題にされたが、1986年になって著者は中蘇友好協会の招待で故国を訪問している。

なお、著者は自身との関係も含めて張聞天の一生を記しているが、ここでは、著者が直接に関係をもった部分を中心に訳出し、それ以外のところは一部省略した。

## 1. 1920-30年代

私が張聞天に初めて会ったのは、1923年春輝中学でのことであった。かれは学校当局の招きで来たのであった。当時かれはアメリカから帰国したばかりで、学生と教師にアメリカ滞在の印象を話すようにと招かれたのである。我校には当時かれの弟、張健爾が学んでいたので、聞天にはついでに弟を訪ねる機会にもなった。張聞天の名は、この頃までに『小説月報』や『少年中国』に発表された作品や翻訳によってすでに知っていた。のちに私が上海大学で学んでいた時、私たちはとても仲良くなり、たびたび一緒に散歩した。かれは自分の生活について多くのことを語っ

た。

張聞天は1900年、上海から遠くない南匯県の農民の家庭に生まれた。17年、沈沢民(茅盾の弟)とともに、南京に創設されたばかりの河海工程専門学校に入学した。かれらはともに積極的に五四運動に参加し、李大釗の参加を得て結成されたばかりの少年中国学会に入った。21年、張聞天と沈沢民は学校を去った。張はフランス留学準備のための養成所に入った。しかし1年後、沈沢民と一緒に日本へ行き、日本語の勉強を始めた。ちょうどその頃、かれは文学活動に熱中した。沈雁冰(茅盾)の編集になる『小説月報』にレフ・トルストイに関するかれの初めての論文が発表された。

1922年、張聞天はアメリカへ行った。カリフォルニア大学(サンフランシスコ)で学びながら、食べるためにレストランで皿洗いをして働いた。同時にかれは中国語で発行されていた『大同日報』を編集した。

1923年後半に帰国し<sup>2)</sup>、ある時期上海の中華書局で働いていた。24年の末、かれは上海から四川省へ行き、女子師範学校で教鞭をとった。25年の五卅運動の時に上海へ戻った。私は立達学園の寄宿舎の張健孫の部屋で偶然かれに会った。師範学校をやめて差当り仕事も住む所もないのだと、かれは私に告げた。私たちは政治的な話題を話しあった。わかったのは、張聞天はまだいかなる政党にも所属しておらず、国家主義者が執拗にかれを引き入れようとしていたが、かれはきっぱりと拒んでいるということであった。私は当時すでに中共黨員であったが、それをかれに打ちあける決心がつかなかった。話のなかで私は手始めに国民党への入党を提案したが、かれは共産党に入るだろうと率直に述べた。このかれの意向を私は喜んで支持した。後になって知ったのだが、かれの友達で、すでに中共黨員として日本から帰国した沈沢民と、中華書局で働いていた共産主義者の李達が張聞天を中共黨員に推薦していたのであった。25年夏、かれは入党を認められた。

党活動に没頭しながら、しかし張聞天は文学の創作のためにも時間をみついていた。かれはバイロンについての英文の論文を翻訳し、戯曲「青春の夢」や小説「逃亡者」、長編小説「旅途」など多くの作品を書いた<sup>3)</sup>。もし政治活動と理論活動がかれの生活を占めていなければ、張聞天は必ず文壇で名声を得ていたであろう、と私は思った。

1925年末、張聞天は私と同じ時にモスクワへ行き、ヴォルホンカ通16番地にあった孫逸仙記念中国労働者大学に入った。私が学んでいたクートベは当時ストラストナヤ（現プーシキン）広場であって、私たちの大学間の距離は市電〈A〉で10～15分だったので、私たちはかなりしばしば逢った。

かれは、すばらしい才能のおかげで短期間にロシア語を習得し、他の聴講者のために講義を通訳することができるようになった。授業の余暇には授業の資料、マルクス・レーニン主義の文献、すなわちエンゲルス『家族の起源、私有財産と国家』、レーニン『プロレタリア革命と背教者カウツキー』と『国家と革命』を翻訳した。これらの翻訳はロシア語を十分に使えない私たちにとって大きな助けであった。慣行に従って、便宜上、そして秘密活動も考えて、すべての中国人学生にロシア名が与えられた。張聞天はイズマイロフとなったが、かれのペンネームの思美と洛甫もここから出ている。

私が1927年夏に中国へ行き、そこから戻ってのち、私たちは、ある学校、すなわち以前の孫逸仙大学を基礎に設立された中国労働者共産主義大学で一緒になった。ともに高級課程の講師班で学んだ。授業はロシア語で進められたので、私たちは講義やゼミナールで通訳をせねばならず、他の学生のために授業の資料や参考書を翻訳しなければならなかった。講師班で私たちと一緒に学んでいたのは、沈沢民（グトコフ）、王稼祥（コムナル）、陳紹禹（ゴルベフ）、秦邦憲（ボゴレロフ——かれのペンネーム博古はここから）、烏蘭夫（ラシェヴィチ）、薛萼果または孫治方（フィンゲル）、楊放之（ウラロフ）、李培之（アノソヴァ）、黄勵（チャプリナ）等であった。講師班で授業をしたのは、当時の有名な学者たちであった。すなわち、政治経済学ではマルティノフとレオンティエフ、歴史学ではベルマンとミラシェフスキー、ソ連共産党（ボ）史とマルクス・レーニン主義理論ではヴラソヴァ、中国問題ではミフ、ヴォーリン、ヨルク。有名なドイツの共産主義者タリゲルマンが哲学を教えた。授業は効果的な方法で行なわれたので、ある期間を過ぎると、私たち自身で教えられるようになり、通訳なしに中国語で授業を行なった。

大学では、政治活動で沸き立っていて、際限のない争論と討論が行なわれ、時々、分派闘争が爆発した。ある学生たちは形式的に共産黨員、

共青団員であったのであって、実際には最後まで国民党と切れていなかったことを考えるなら、分派闘争は避けられないことであった。他の一部の学生たちは遠くない過去において当時の校長ラデックの率いるトロツキスト反対派に加わったが、今ではしきりに不安定な態度を示している。1925—27年革命の敗北ののち、われわれ全員が辛い思いで過ごした。ある共産黨員や共青団員たちはふさいだ気持ちになり、時々には絶望におそわれる状態となったが、反対に別の人々は極左的な熱情にかられた。しかし大部分の人々はしっかりしており、動揺していなかった。その中には、講師班のほとんど全ての聴講生が含まれ、もちろん、張聞天もそうであった。私は当時党事務局の書記代理をしていたので、分派主義の現象や不健全な空気との闘いにおけるかれの役割をよく知っていた。ただ、「28人半のポリシェヴィキ」に名を連ねていた者たちだけが党の路線を擁護したというような、後年になって流布した説はまったく派閥的な虚構である。

クートカにおける闘争はとくに1929年の党内粛清の時に尖鋭化した。この運動の結果、一部の黨員と共青団員は除名され、他の者たちは厳しい処分をうけた<sup>4)</sup>。クートカは国際レーニン学校に統合され、消滅した。

1928年の夏、張聞天は、私と同じく、中共6全大会とその少し後に開かれるコミンテルン6回大会に参加のためモスクワに来る中国の代表団にサービスする学生グループに入れられた。グループの一半の者たちの主な任務は大会の文献をロシア語から中国語に、中国語からロシア語に翻訳することであった。他の者たちはそれらの清書と文献の複写に従事した。仕事は大量で骨の折れるもので、私たちは秋近くになってようやく仕事を終えた。

1929年9月<sup>5)</sup>、張聞天と私は赤色教授学院に入学した。かれは王稼祥や沈沢民とともに学院の東方部に入れられ、私は予科に入れられた。その後、私は赤色教授党史研究所の聴講生になった。赤色教授学院に入学した時から、私たちはコミンテルン執行委員会東方書記局と密接な関係をもつことになった。当時書記局の主任はクーシネン、主任代理がミフとマジャーレであった。私たちは中国から非合法に届いた中国語の文献を読んで要約をつくり、報告書を書いた。もっとも重要な文献類はコミンテルン執行委員会の指導部のためにロシア語に翻訳された。私たちは

また中国へ送る指示文書の中国語への翻訳にもたずさり、東方書記局と駐ソミンテルン中国代表団との会議では報告や発表を行なった。

1930年夏、モスクワに来た周恩来はコミンテルン執行委員会議長団に報告を行なった。私がかれの演説を通訳し、すべての協議、会議、個人的会見の際には通訳としてかれの傍らにいた。張聞天も何回か周恩来に会った。私たちはこの状況を利用することに決め、東方書記局の依頼で中国の刊行物に発表するため書いた自分たちの論文を周恩来に渡した。張聞天は「中国革命の性質と推進力」、私のは「中国におけるソビエト運動とその歴史的意義」であった。2編の論文に対して周恩来は、多少個人的見解であるとしつつ、よい評価を与えてくれた。

31年春、張聞天は上海へ帰った。そこで中共中央宣伝部長に就任した。同年6月、上海に臨時中央政治局が組織され、張聞天は常任委員会の一員となった。33年かれは江西省の中央ソ区へ行き、34年の中共5中全会で中央政治局員と書記処書記に選ばれた。第2回ソビエト全国代表大会ではかれは中華ソビエト共和国人民委員会主席に選ばれた。

（中略）

## 2. 人民共和國時代

全国解放ののち党は張聞天を外交工作にまわした。かれは、中華人民共和国の国連常任代表に承認を期待しつつ、指名された。しかし国連は当時中華人民共和国の承認にいたっていなかったため、信任状は出なかった。それから初代の外交部副部長に任命され（部長は周恩来）、同時に駐ソ特命全権大使にも任ぜられた。このポストにあって、かれはソ連と中国との間の友好と団結の強化のために多くのことを為した。

1954年末、私が17年間の不在ののちモスクワに戻った時、張聞天はまだモスクワの中華人民共和国大使館を指導していた。私はとてもかれに会いたいと思ったが、それは不可能だとわかった。まもなくかれは北京に召還され、数年間外交部副部長として働いた。

（中略）

1957年、周恩来の招きで私は家族とともに中国へ行った。招待は57年初めモスクワでかれに会ったあと受けた。その時、かれは賀龍元帥と一

緒にソ連を公式訪問中であった。私が北京にいることを知って、張聞天は私を自宅に招待し、心から歓迎してくれた。私たちは仕事について、自分自身について、体験したことについて、長い間話し合った。私がかれの妻・劉英<sup>6</sup>（彼女は当時外交部長の助手として働いていた）に会ったことがとても嬉しかった。彼女とも昔、彼女がクートカで学んでいた時よく知っていた。その後、妻と娘を伴った私と妻を連れ張聞天は、武漢大橋の開通式に参加するため武漢へ旅行した。招待は鉄道部長の滕代遠から出ていた（モスクワではかれは李光として知られていた。私は一緒に仕事をしてかれをよく知っており、私たち2人は1935年のコミンテルン7回大会への中共代表団のメンバーであった）。私たちが展望車に乗ったり、ホテルにいたり、武昌近郊の別荘で休息したりしている間に、私と張聞天はたくさんのことを長い時間語り合った。武漢で過ごしたこの数日間私たちと一緒にだったのは、李富春、陸定一等であった。李達学長の招きで私たちは武漢大学を訪問し、そのあと舟遊びをし、多くの有名な場所を見物した。高い地位にあるにもかかわらず、張聞天は良き古い友達として接してくれて、とても率直な態度であり、私と私の家族に対して誠実で親切であった。北京での別れに際して、かれは私の仕事にとっても必要な多くの書物と文献を贈ってくれ、それらを自身でモスクワへ発送してくれた。

ついで1958年、私はソ連科学アカデミーにより中国へ派遣された。私に到着した時は、大躍進、人民公社化運動、そして反右派闘争の最盛期であった。私は多くの省と十大都市を訪れ、多くの農村を回って、各地の状況を知った。至る処で鉄をつくるための小さく原始的な炉が煙を吐いているのをこの目で見た。この仕事のために巨大な労働力を投入し、通りで、広場で、農家の庭で、また公園でも、製鉄が行なわれていた。「試験用農場」で稲の播種が高い密度で行なわれるのを見た。公共食堂で人々が無料で支給される食物を腹一杯食べ、共産主義の生活様式では家庭の台所は不要であるとして台所のない家が建てられるのを見た。またすべての家庭の家禽が公共化を避けるために農民たちによって食べ尽くされ、すべての公社で軍をモデルに「分遣隊」「小隊」「大隊」が組織されていることも知った。工場で2倍、3倍の生産ノルマを遂行しようとの労働者へのアピールを読んだ。道路に、家の壁に、部屋に、至る処

に大躍進を呼びかけた看板やポスターが掛かっていた。1日中、太鼓やティンパニーや銅羅を持った人々の大集団が狂ったように大声でスローガンを叫びながら通りを歩いていた。地域の指導者たちとの会談や一般の人々との会話の中で、私は信じられないような成果と途方もない計画について熱狂的な話を聞いた。別の印象もあった。北京と上海で私はいくつかの「批判集会」に出席することが出来た。そこでは、順番に進み出て、あらゆる新たな「罪」を見つけては辛辣な言葉で容赦なく「右派分子を暴いていた」。

北京に戻った直後に私は張聞天にかれの家の食事に招かれた。旅行の各地での見聞について感動を欠いた私の話を、かれは注意深く聴いた。張聞天が一般の騒ぎを共にしていないことに私はすぐ気づいた。かれの話には経験ある政治家の慎重さ、条理にかなった考慮、冷静な分析、まじめな態度が滲み出ていた。私の出発の前日、北京飯店の私のところへ立ち寄って、再び私の研究に必要な多くの書籍と資料をくれた。実のところ、私の方は北京に到着後に幾冊かのロシア語の書籍をかれに渡していた。その中には外交政策に関するレーニンの論文集もあった。

初代の外交部副部長として張聞天は世界のさまざまな国を旅行し、中国の駐外使館の外交官の仕事を検査した。1959年夏、東ヨーロッパ諸国への初めての旅行ののち、かれはモスクワへ来て、すぐに私を中国大使館に招いてくれた。私たちは長い時間語り合った。かれは、大躍進の結果や人民公社の事業と反「右派」闘争における行き過ぎに極めて批判的な評価を下し、そして、実行された方針が全国に重大な損失をもたらしたプチ・ブル極左主義者の跳ね上がりであるとみなした。かれはその時の大使・劉暉に中共中央上海総会（8届7中全会——訳者）の決議を含む一連の文書を私に見せるよう頼んだ。その決議では、経済建設における党の政策を再検討していた。張聞天はモスクワに数日滞り、毎日私と会った。私たちは一緒にルージニクのスポーツ宮殿にウィーンの氷上バレーの公園「アイス・レビュー」を見に行った。当時氷上バレーはまだ珍しかった。かれは私の家族に会い、私がどのように生活しているか見たいと言って私の家にも来た。かれは私の仕事について詳しく尋ねた。この頃私は『現代中国社会思想史』という本を書いていた。張聞天はこの著作にたいへん興味を持ち、その刊行は非常に大きな意義があるだろ

うと強調した。かれは私の机の前に座り、机の上や周りに置かれた文献や原稿を見て、こう言った。「私はあなたが羨ましい。あなたは静かに学術研究に打ち込むことが出来るが、私はそれをただ念願するだけだ。私には問題を静かに熟慮するための時間さえ無い。1日が会議、接待、電話での話、文書の閲読等々で過ぎてゆく。」

張聞天の帰国後しばらく行なわれた廬山会議で、かれは彭徳懐、黄克誠、周小舟と共に大躍進と人民公社化運動の期間に党の政策に表われた経済上の冒険主義と左翼日和見主義者の跳ね上りに対して厳しい批判を行なった。この発言は毛沢東とかれの同調者たちの激しい怒りをかった。その結果、張聞天、彭徳懐、黄克誠、周小舟は「反党右翼日和見分子」として審査を受け、職を解かれた。後になって私は中国外交部の前職員のある同志から、次のように聞いた。すなわち、外交部の「批判集会」で張聞天は私との関係について話すよう求められ、かれがモスクワで私と何について話したか、いかなる「党の秘密」を私に洩らしたか等々を執拗に糾問された、と。

（後略）<sup>7)</sup>

#### 注

- 1) 著者は、1930年代にすでに中国情勢や中共の政策などについて10編ほどの論文をソ連やコミンテルンの雑誌に発表している（П.Е. Скачков, *Библиография Китая*. Москва, Изд-во восточной литературы, 1960. 参照）。
- 2) 最近の中国では、張聞天のアメリカからの帰国の時期は1924年1月としている（例えば本書編輯組『回憶張聞天』, 湖南人民出版社, 1985, 380頁）。
- 3) 張聞天の文学活動については、程中原『張聞天与新文学運動』（江蘇文芸出版社, 1987）が詳しい。特に本書中の附録「張聞天早年著訳系年」参照。
- 4) クートカにおける党内闘争については、曹仲彬・戴茂林『莫斯科中山大学与王明』（黒竜江人民出版社, 1988）参照。
- 5) 中国の文献では、1928年夏としている（前掲『回憶張聞天』, 2頁, および李敬永「張聞天的青年時代」, 『革命回憶録』19, 人民出版社, 1986, 181頁）。
- 6) 1905年、湖南省長沙県に生まれた。25年、中国共産党に入党。長沙女子師範学校を卒業後、湖南で党活動に従事。29年、党中央によりソ連へ派遣されてクートカに入学。クートカ廃校後、国際無線学校で学ぶ。32年帰国し

て中央ソ区へ行き、共青团中央局の宣伝部長などを務めた。長征に参加して、陝北到着後、張聞天と結婚。51年、駐ソ大使として赴任する張聞天と共にモスクワへ赴き、大使館で働く。54年に周恩来に呼ばれて帰国し、外交部長助手と人事司長を兼任した。廬山会議における張聞天批判は彼女にも及び、張と同じく右翼日和見分子として一切の職務を解かれた。文革後の11届3中全会で中央紀律検査委員会の委員に選ばれている（本書編輯組『女兵列伝』第1集、上海文芸出版社、1985、119-133頁）。

- 7) 張聞天は、1960年から65年まで中国科学院経済研究所の特約研究員として研究と文筆活動に従事したが、文革の開始と同時に厳しい迫害にさらされた。76年7月1日、心臓病により死去。79年になって名誉回復された。ゴ・シャオタンは、同年8月に行なわれた追悼会における悼詞からの引用でこの回想を結んでいる。